



慶應義塾家計パネル調査ニュース第2号

2005年12月

第2号によせて

この慶應パネル調査ニュースは、皆様のご協力により本年1月に実施された慶應義塾大学家計パネル調査(KHPS)の回答結果に基づき分析した結果を、人々の関心がありそうな項目について抜き出し取りまとめたものです。

慶應義塾大学大学院経済学研究科および商学研究科は3年前より文部科学省の21世紀COEの研究教育機関(「世界的研究教育拠点形成のための重点的支援機関」として選ばれ、全国の20歳から69歳までの男女4000人の方を無作為に抽出し回答をお願いするパネル調査を行なっていました。そして今年6月には専門家による文部科学省の中間審査が行なわれ、4段階の最上位に当たるAランキングとの評価を得ることができました。

皆様にご協力いただいております調査結果からは、学術論文も多数生まれており、マスコミにおいても取り上げられております。これらの成果を上げることができましたのも、一重に調査回答者皆様のご協力のお陰であり、心より感謝申し上げます。

われわれ研究員一同、パネル調査がわが国の経済学の発展や政策の向上に不可欠であるという認識のもと、皆様のご協力を無駄にすることのないよう、研究に邁進して行く覚悟でおりますので、今後ともご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

慶應義塾大学経商連携21世紀COEプログラム
パネルデータ班責任者 慶應義塾大学教授
樋口美雄

生活について 家事・育児の分担、喫煙、インターネット利用、家電リサイクルなどの生活上の行動についてみてみます。

1. 男性の家事・育児参加はまだ低い？

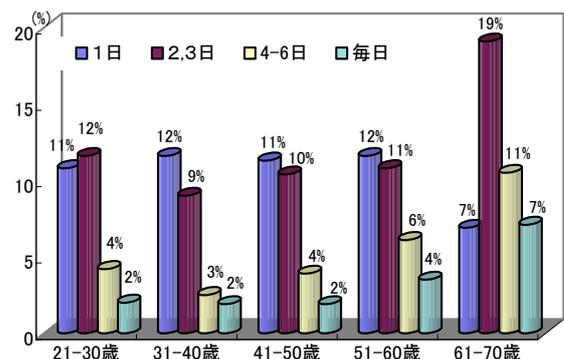
夫婦の家事・育児

家事労働の大部分が妻に依存しており、「ほとんど毎日」家事労働を行っているという妻の割合は96.4%に達します。これに対して、夫は「ほとんど毎日」もしくは「週に数回」と回答した人が30%ほどいる一方で、「ほとんどやっていない」または「まったくやっていない」という割合も60%になっています。夫の年齢層別にみると、「ほとんど毎日」もしくは「週に数回」と回答した割合は20代、30代で高く、その後年齢が上がるにつれ低下しますが、60歳以上になると再び上昇するという傾向が見られます。これらは、若年世代における夫の家事参加に対する意識の変化と、退職後の家事への参加という側面を反映しているものと考えられます。ただし、週当たりの平均家事時間でみると、どの年齢層でも3時間未満となっており、依然として家事労働の担い手は妻中心であるといわざるを得ないのかもしれない。

運動を行っている人について、週に何日くらい行っているかを、年代別にみると、31~60歳までの年代では、週に1日という人が最も多いのに比べ、61~70歳では全体の約2割の人が週に2・3日運動を行っており、最も多くなっています。

また、毎日運動を行う人は50歳以下では2%程度しかいないのに対して、61~70歳では7%と多くなっています。

高齢者ほど、運動を行う人も多く、運動の頻度も高くなっており、健康に対する関心が高くなっていることがうかがえます。

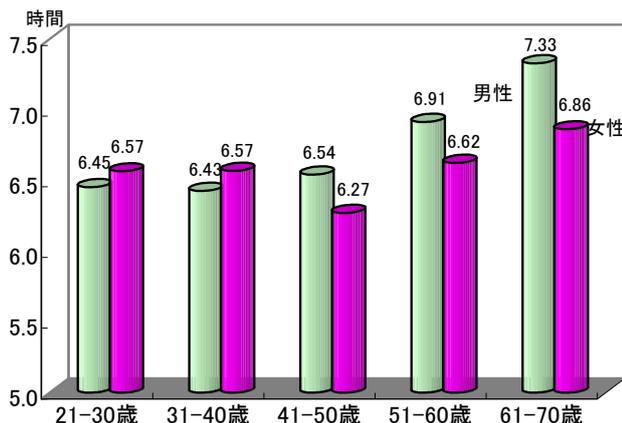


2 高年齢ほど長くなる男性の睡眠時間

1日平均の睡眠時間

男女・年代別に1日の睡眠時間をみると、40歳までの年代では女性の方が若干睡眠時間が長いのですが、年代が上がるほど男性の睡眠時間の方が長くなり、61~70歳では平均で約30分、男性が女性より長くなっています。

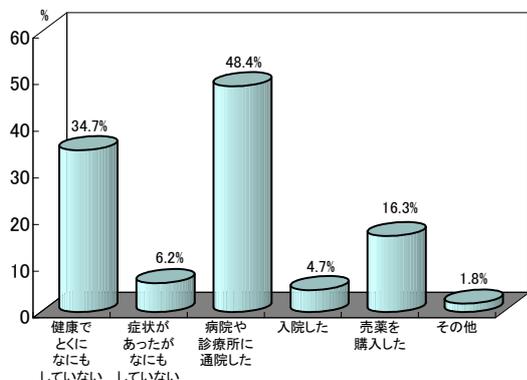
しかし、長いといっても平均で約7時間20分です。これは、若いころ仕事が忙しくて睡眠時間が取れなかった反動というより、むしろ十分な睡眠を取れる余裕ができてきたということなのでしょう。



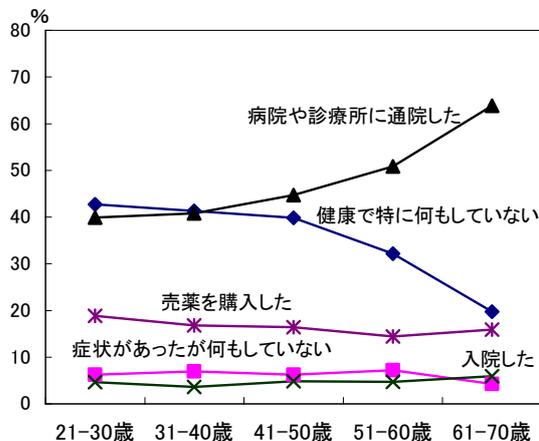
3 病気になったらやはり病院へ

昨年1年間の通院・入院などの治療

昨年1年間で、健康で治療を必要としなかった人は全体の約3分の1で、残り3分の2の人はなんらかの病気の症状がありました。症状があった場合の処置としては全体の約半分の人が通院しており、売薬を購入した人が16%、何もしなかった人が6%と続いています。これは、病気の症状があった人の4人に3人は通院していることになります。



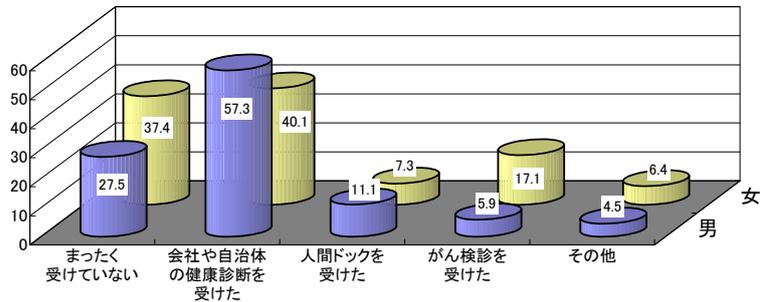
1年間の通院・入院などの治療の状況を年代別にみると、20歳代から40歳代までは健康でとくになにもしていない人と病院や診療所に通院した人はほぼ同じ割合であるのに対し、50歳代、60歳代では通院した人の割合が急激に増加しており、この年代が通院した人の割合を引き上げています。それに対して、売薬を購入した人の割合は各年代を通じて約2割とあまり変化がありません。



4 女性の4割は健康診断を受けていない

昨年1年間の健康診断の受診状態

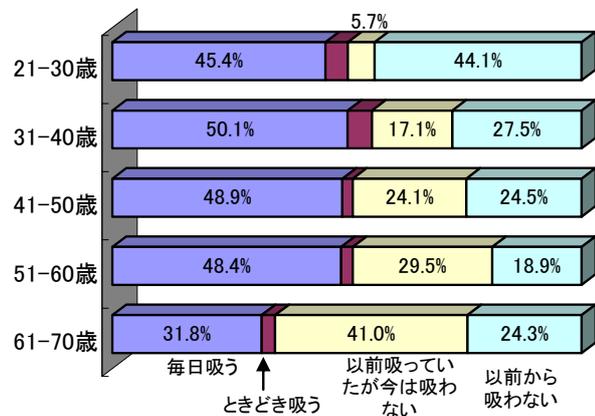
女性では昨年1年間で健康診断を受けていないと答えた人が37.4%おり、男性より10%も高くなっています。男性では、57.3%の人が会社や自治体の健康診断を受けたと答えたのに対し、女性は40.1%と低くなっており、主婦やパート労働の女性は健康診断を受ける機会が少なくなりがちなことを反映していると思われます。自治体の無料検診などを積極的に利用することが必要なのではないでしょうか。



5 年代があがるにつれ禁煙する人が増加

喫煙の状態

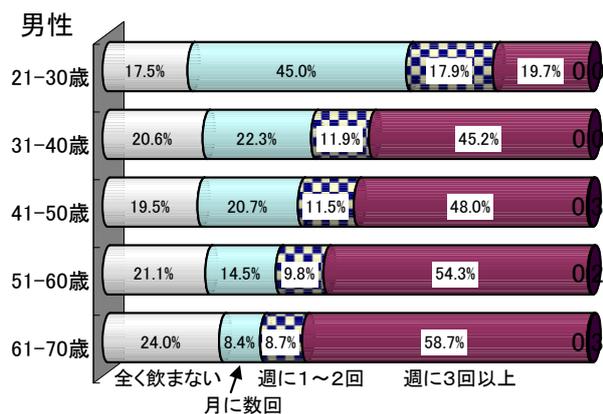
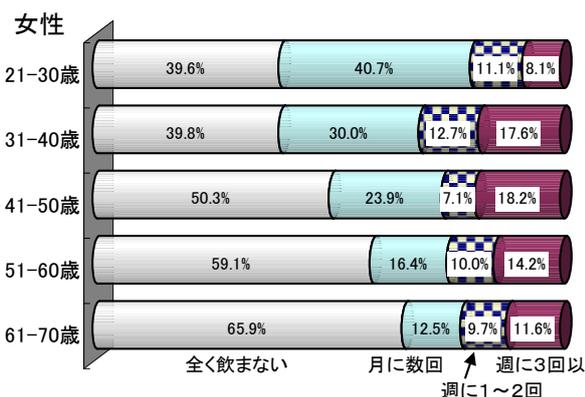
男性の喫煙状態は、全体の約半分 48.4%が喫煙者となっています。年代別にみると61~70歳では喫煙者は約3割と少なくなっており、「以前は吸っていたが今は吸わない」という禁煙を実行した人が4割以上を占めています。禁煙した元喫煙者の割合は年代が上がるにつれて、増加しているのに対し、21~30歳の若年層ではもともと喫煙しない人の割合が多くなっています。やはり、健康のためには禁煙という意識が広がってきたようです。



6 若年層はお酒とほどほどのつきあい

最近の飲酒の習慣

最近の飲酒習慣の状況を年代別にみると、男性では飲酒の習慣のある人はどの年代でも約8割とあまり変わらないのですが、頻度をみると61~70歳では、6割の人が「週に3回以上」飲むのに対して、21~30歳では「週に3回以上」飲む人は2割で、5割近くの人が「月に数回」飲むと答えており、高齢層ほど酒飲みが多くなっています。



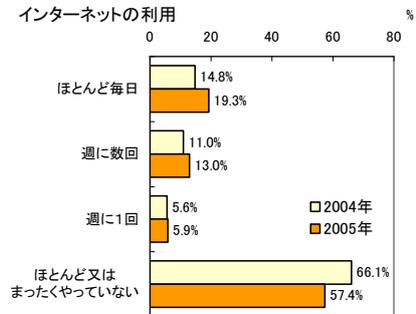
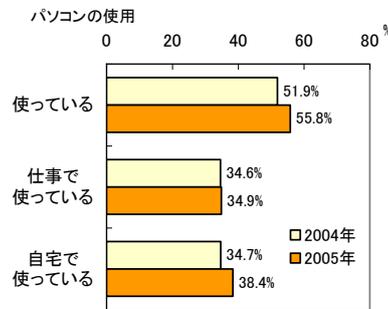
女性では、年代が下がるにつれて、飲酒の習慣のある人の割合が多くなっていますが、頻度でみると「月に数回」飲む人が多くになっており、若い年代の女性はお酒を適度に楽しんでいるという傾向がうかがえます。



7 5人に1人は毎日インターネットにアクセス

ふだんのパソコンの使用とインターネット接続

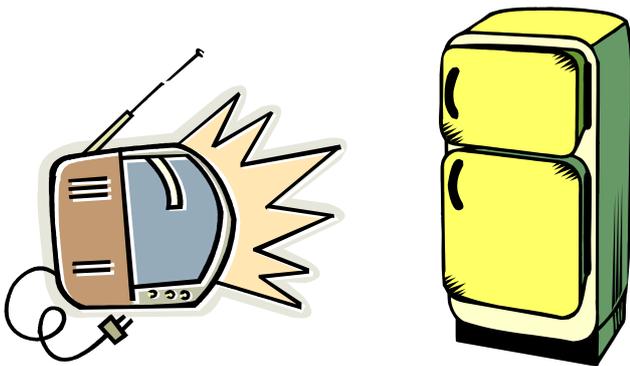
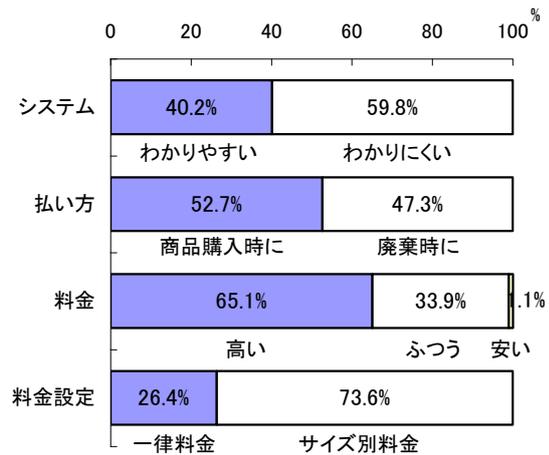
ふだんパソコンを使用している人の割合は、昨年の調査より4%増えていますが、仕事で使っている人の割合はほとんど変わっておらず、自宅で個人的に利用している人が増えています。また、インターネットに接続している人の割合も増加しており、約4割の人がインターネットを利用していますが、なかでも「ほとんど毎日」利用している人が2割近くおり、5人に1人は毎日、インターネットにアクセスすることになります。



8 高いと感じるリサイクル料金

家電リサイクル法についての考え

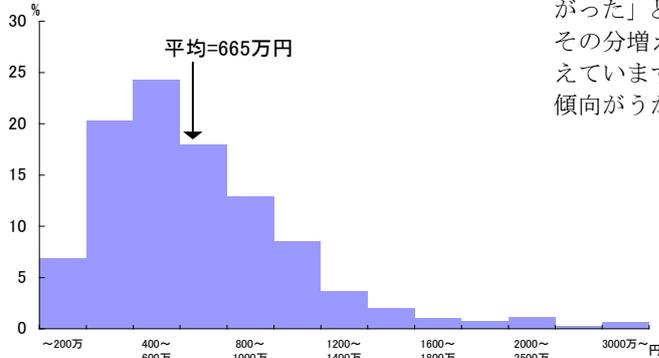
資源の有効活用と環境保護を目的として家電リサイクル法が制定されていますが、この家電リサイクル法の定めるシステムについてどう思っているか聞いたところ、「システムがわかりにくい」と答えた人が約6割に達しました。システムの説明・周知をもっと行う必要があるようです。リサイクル料金の支払い方では、「商品購入時に」が良いという意見が、現行の「廃棄時に」を若干上回りました。リサイクル料金は全体の3分の2の人が「高い」と答えており、料金の割高感が根強いようです。また、料金設定についても現行ではほとんどが品目ごとに一律に設定されているようですが、サイズ別に変えてほしいという意見が7割以上を占めています。



家計収支と貯蓄・借入について 景気は上向いているといわれていますが、家計の実態はどうなのでしょう

1 収入は下げ止まりのきざし

昨年の世帯全体の収入と前年からの変化



昨年1年間の世帯全体の収入は平均で665万円でしたが、全体の約25%の人は400～600万円の年収となっています。前年からの変化を2004年の調査と比較してみると、「下がった」という人が約5%減り、「変化しない」という人がその分増えています。まだ、3割の人が「下がった」と答えていますから楽観はできませんが、収入の下げ止まりの傾向がうかがえます。

前年からの収入の変

	上がった	変化しない	下がった
2004年	15.0%	48.4%	36.6%
2005年	15.0%	53.2%	31.3%

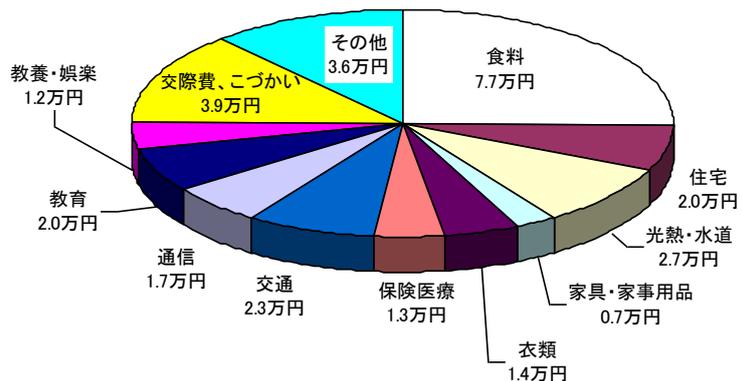
2 1月の支出は平均で30万9千円

世帯全体の1か月の生活費の支出

2005年1月1か月間の支出(平均30万9千円)の内訳をみると、食料が7万7千円で25%と最も大きな割合を占めています。2番目は3万9千円の交際費、こづかい、3番目は2万7千円の光熱・水道ですが、1月はお年玉が交際費、こづかいに暖房費が光熱・水道に含まれるためにこれらの費目への支出が多くなっていると考えられます。

1か月の費目別支出額

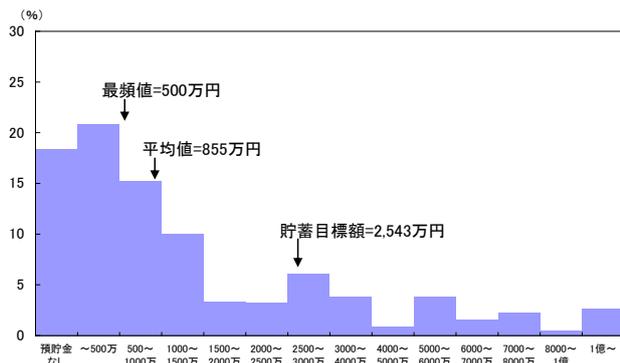
支出合計 30.9万円



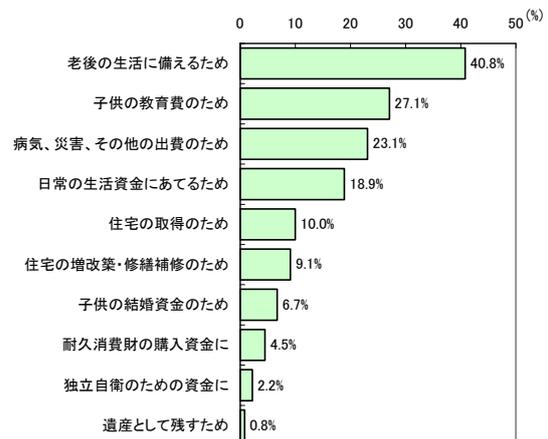
3 老後の資金は自分で貯める

預貯金の現在額と貯蓄の目的

世帯での預貯金額は、平均値が855万円、最頻値(最も多くの方が答えた金額)が500万円となっています。貯蓄の目標額をみると、平均で2543万円で、現在額とは大きく隔たっており、現実はなかなか厳しいようです。



貯蓄する目的としては、約4割の人が「老後の生活に備えるため」と答えています。公的年金に対する将来不安の表れでしょうか。2番目には「子供の教育費のため」、3番目には「病気、災害、その他の出費のため」が続いています。

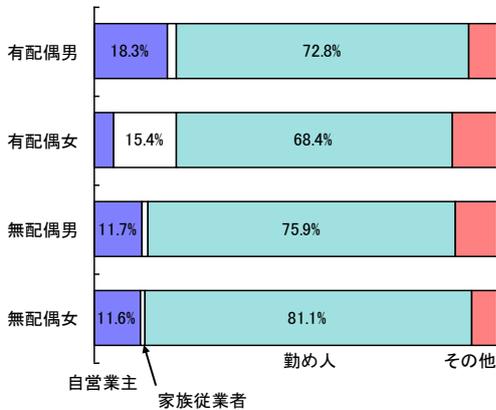
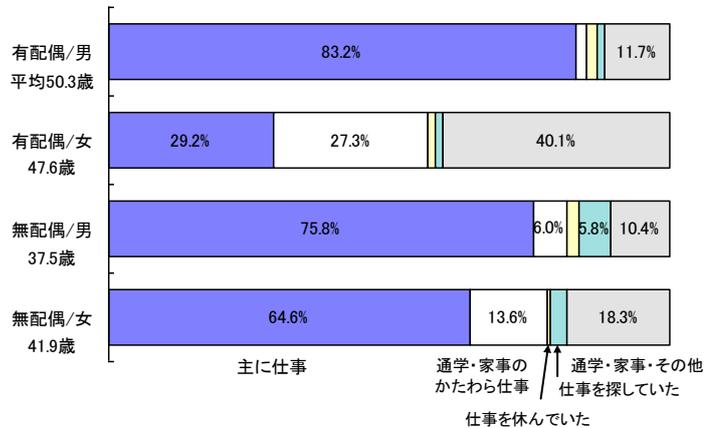


就業について 男女・配偶者の有無による就業の実態を見えます。

1 まだ低い配偶者のいる女性の就業

男女・配偶関係別の就業状態

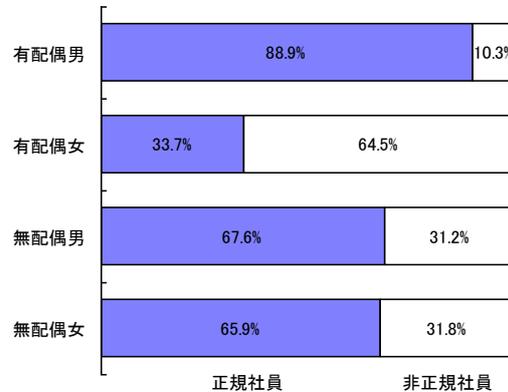
配偶者のいる女性にはいわゆる専業主婦が含まれるため、就業者の割合が小さくなります。配偶者のいる男性の8割以上が「主に仕事」をしているのに対し、配偶者のいる女性では約4割が「通学・家事・その他」であり、仕事を持っている人でも半分は「家事のかたわら仕事」をしています。配偶者のいない人には、学生や高齢の単身者などが含まれるため、配偶者のいる男性よりは就業者の割合は低くなりますが男女ともに約8割の人が仕事を持っています。



2 配偶者のいない人は勤め人が多い

男女・配偶関係別の就業者の職位

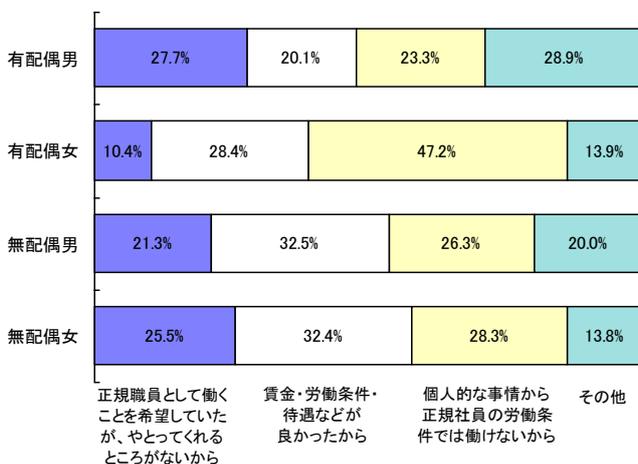
就業している人について、形態をみると配偶者のいる男性は自営業主の割合が多くなっており、それに対応して配偶者のいる女性は家族従業者の割合が他より多くなっています。それに対し、配偶者のいない人は男女ともに勤め人の割合が多くなっています。



3 配偶者のいる女性はパート・アルバイトが多い

勤め人の正規社員と非正規社員の割合

お勤めをしている人について、いわゆる正規社員とパート・アルバイトや派遣労働などの非正規社員のどちらで働いているかをみると、配偶者のいる男性は約9割が正規社員であるのに対して、配偶者のいる女性は3分の2が非正規社員であることがわかります。また、配偶者のいない人では男女とも正規社員の割合が約3分の2となっており、配偶者のいる女性の非正規社員の割合が際だって高くなっています。



4 非正規社員の事情はさまざま

非正規社員で働いている理由

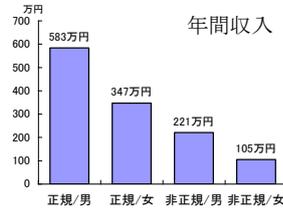
非正規社員として働いている理由は、配偶者のいる男性では、「正規社員を希望していたが雇ってくれるところがないから」、配偶者のいる女性では「個人的な事情で正規社員として働けないから」がそれぞれ一番多いのに対し、配偶者のいない人では男女とも「賃金・労働条件・処遇などが良いから」が一番多くなっています。すべての人が同じとはいえないものの、男女・配偶者の有無によって非正規社員として働く理由が異なっている様子がうかがえます。

5 やはり正社員は待遇が良い

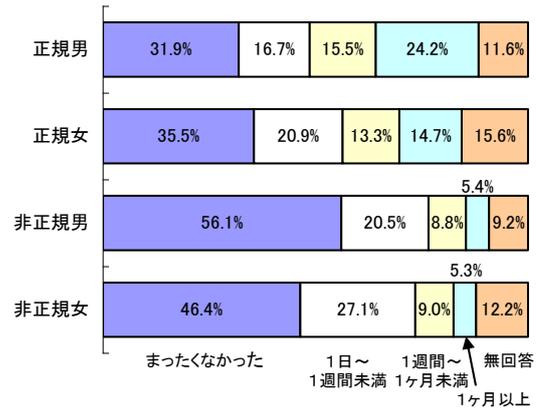
雇用の正規・非正規別の収入と研修

正規社員と非正規社員の平均年収を男女別に比べてみると、正規社員の男性の583万円から非正規社員の女性の105万円まで大きな違いがあることがわかります。また、正規社員でも女性は347万円と男性より低くなっています。

入社したときの研修の有無及び期間をみても非正規社員では約半分が「まったくなかった」と答えています。正規社員では男女で研修の有無には差がないものの、研修期間では男性のほうが長い傾向があります。



入社時の研修など

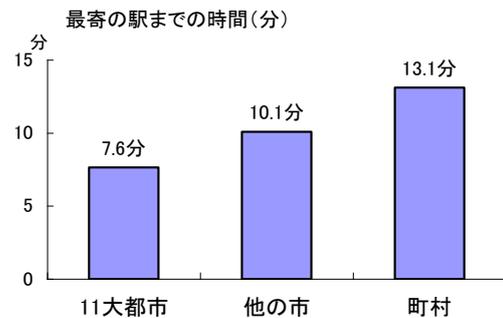
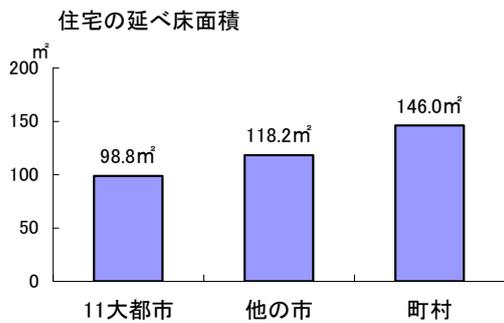
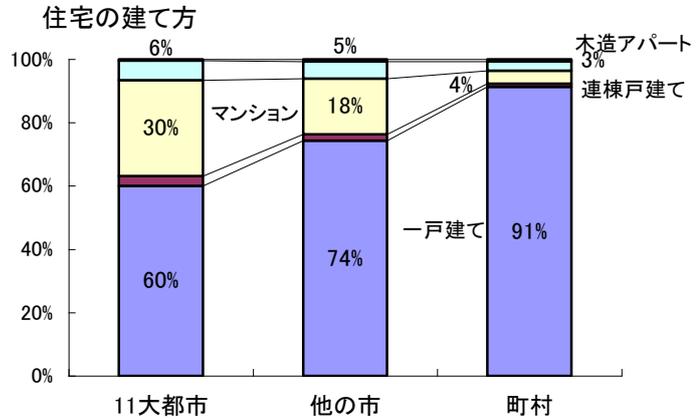


住宅について 都市部と町村部の住宅事情の違いと現住居への転居と将来の予定について見てみます

1 少し不便でも大きな家なら郊外で

都市部・町村部別の住宅の状態

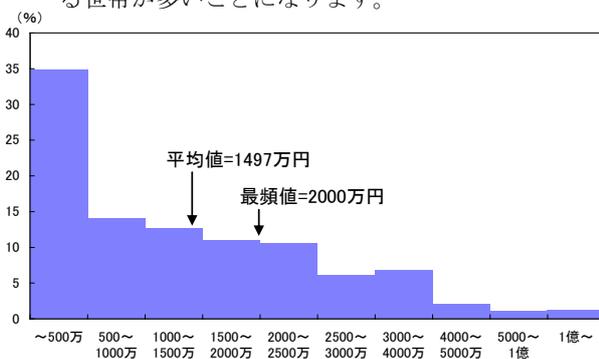
全国を13大都市、13大都市以外の市、町村の3つに分けて比べてみると、住宅の形態としてはやはり町村部では一戸建てが多く90%以上でマンションは4%にすぎないのに対し、13大都市以外の市ではマンションが18%、13大都市では30%がマンション住まいとなっています。また、居住面積も町村部の平均146平方メートルに対し13大都市では99㎡と3割以上狭くなっており、町村部の人のほうが広い一戸建てに住んでいます。一方、住居から最寄の駅までの時間をみると、町村部は13.1分と13大都市の7.6分の2倍近くになっています。やはり、広い家がほしいなら郊外、便利なところに住みたければ都市という選択になるようです。



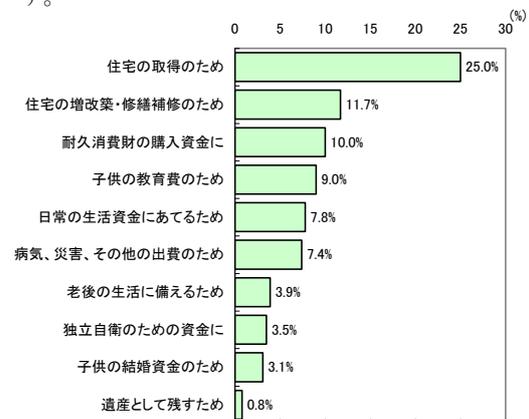
2 住宅取得はローン頼り

借入金の現在額と借入の目的

借入金のある世帯は全体の38%です。借入金のある世帯の借入残高の平均値は1497万円、最頻値は2000万円となっており、相当多額の借入をしている世帯が多いこととなります。



借入の目的は「住宅の取得のため」が25%で最も多く、2番目も「住宅の増改築・修繕補修のため」と住宅に関する借入が上位を占めています。

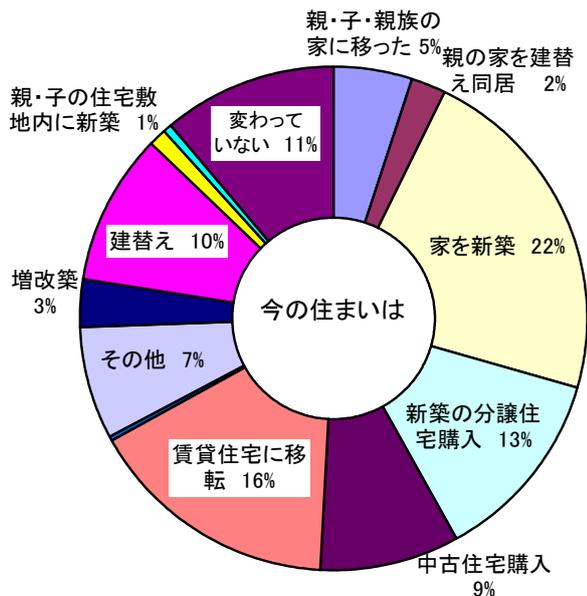


3 今の住まいの半分は新築時に入居

今の住まいに住居を変えた時の状況

今の住まいに住居を変えたときの状況を見ると、「家を新築した」人が22%と一番多くなっています。これに、新築分譲住宅の購入や建替えなどを含めると新築の家に入居した人は全体の48%と全体の半分以上を占め、日本人の新築住宅指向がうかがえます。

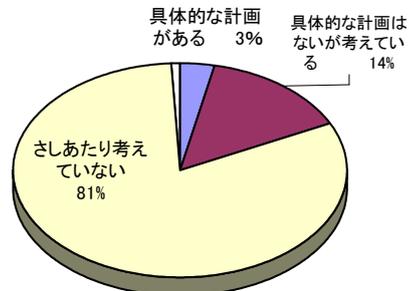
また、生まれたときから住まいが全く変わっていない人は11%だけとなっており、ライフサイクルにあった家を求めて転居、建替え等をしていく状況を表しています。



4 約2割の人は移転、新築、購入を意識

今後の住まいの計画について

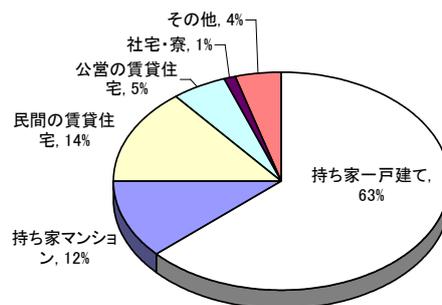
今後の住まいの計画について尋ねたところ、具体的な計画のある人は3%ですが、具体的な計画はないが考えているという人が14%と、かなりの人が新たな住まいを意識していることがわかります。



5 新たな住まいはやはり持ち家一戸建て

次に予定している住まいの種類

住み替えを予定している住宅の種類では、やはり持ち家一戸建てが63%と断然多くなっています。



6 最近の土地価格は下落傾向

現在の敷地価格は来年にはどう変わるか

敷地価格は来年も「変化しない」と答えた人が60%で最も多くなっていますが、昨年調査の類似の質問（敷地価格は昨年と比べてどう変化しましたか）の答えと比較すると、「下がった」と答えた人が32%だったのに比べ、今回「下がる」と答えた人は17%とだいぶ少なくなっており、今回「上がる」と答えた人も5%と割合は少ないものの、前回調査よりは多くなっています。これまでの土地価格の低下傾向が変化すると見る人が増えているようです。

